

植民地主義と〈比較のポリティクス〉—竹越与三郎と持地六三郎の 英領インド植民地政策観を中心に

水 谷 智

同志社大学言語文化教育研究センター 准教授

緒 言

本研究はイギリスと日本の植民地主義を同時代の関係性のなかで捉えなおす新たな歴史叙述に向けてのプロジェクトの一環をなすものである。「比較」を重要な主題として前景化するが、必ずしも日英の植民地主義の「比較研究」が目的ではない。むしろ、植民地統治に関する知・技術の生産の主体者が、いかに比較研究を手段として用いたかに批判的に着目し、その歴史化をはかる。本研究は、特に日本の植民政策学によるイギリス植民地統治の比較参照が、台湾および朝鮮における日本支配とどう関係していたか、その〈比較のポリティクス〉の一端を解明することを目的とした。具体的には、歴史家・政治家として活躍した竹越与三郎(1865年-1950年)と台湾・朝鮮の植民地官僚であった持地六三郎(1867年-1923年)の英領インド植民地政策観をとりあげた。どのような比較の論理と政治がその背景にあったのか、彼らに影響をおよぼした欧米の研究者の同政策にたいする反応の分析を平行して行いつつ検証した。

方 法

本研究の方法は基本的に史料のテキスト分析である。以下の手順で分析をおこなった：

- ①竹越与三郎および持地六三郎の英領インド教育政策観を彼らの著作から析出する。
- ②両者の英領インド教育政策観と日本帝国内における教育政策との関係性—すなわち〈比較のポリティクス〉—を検証する。
- ③両者の英領インド教育政策観と彼らが参照した欧米の植民政策論の関係性を検証する。
- ④両者に参照される欧米の植民政策論自体が、英領インド教育政策をめぐってどういった〈比較のポリティクス〉に立脚していたかを明らかにし、彼らのポリティクスとの関係を探る。

(8月29日-9月5日のあいだ、イギリスに出張し、大英図書館

およびオックスフォード大学で関連一次史料の収集・分析を遂行した。)

結 果

1. 竹越・持地の英領インド教育政策観

竹越と持地は、ともに英領インド教育政策を「失政」とみなす点で共通していた。もっとも、持地の場合、英領インドが抱える政治的問題の原因を教育政策だけにもとめる当時の支配的言説を退けつつ、他にも要因があることを指摘したが、教育政策を失政ととらえたことに変わりはない。両者とも、トーマス・マコーレーによる「教育に関する覚え書き」(1835年)に端を発する英語による人文エリート教育(いわゆる「マコーレー主義教育」)を、同化政策の一種ととらえ、反同化主義の立場からその問題点を指摘した。

たとえば竹越は、1906年の論文のなかで、「歴史家マコーレーなどが印度に赴くに至つて、土人の上流者に向つて稍々教育を施すの端緒を開いたので、斯くて今日の有様となつたのである」と記している[竹越与三郎「韓人教育に就ての謬見」竹越与三郎『比較殖民制度』(読売新聞社、1906年)所収、p.228]。持地と同様、竹越は全般的にはイギリス帝国の植民政策を高く評価していたが、19世前半以降のインドにおける教育政策に関しては、それが現在の政情不安の要因になっているとして、例外的に厳しい判断を下し、「英國は印度を治めて其の功績著しいものにもあるにも係らず、今や印度に教育が普及すると共に不平の聲が立ち、獨立の思想が四方に充満して居る」と記している[同上、p.231]。持地もまた、台湾総督府学務課長であった1910年に起草した論文のなかで、マコーレーをはじめとする19世紀前半から半ばにかけてのイギリス人支配者の熟慮の欠如を批判的に分析し、以下のように述べている：「印度の事情を斟酌せずして、只管英國の教育制度を模倣移植したり、英語を以て教授の用語と為し、英國の政體を教え、歴史を教

え、権利自由の英国的思想を鼓吹せり、此英國的思想に涵養せられたる土人青年が其智識の發達に従ひ印度の政治上經濟上壓抑の現状を目撃して英國統治に不平を懐き、果ては之を打破せんと試むるに至りたるは是れ自然の論理的結果なりと謂はざるを得ず。〔持地六三郎「シャイエ氏インド教育制度問題に就いて」持地六三郎『台湾植民政策』(富山房、1912年)所収、p.586〕

2. 竹越・持地の〈比較のポリティクス〉

竹越と持地がマコーレー主義教育をみずからの植民政策論のなかで比較参照したことは、彼らが日本植民地主義の同化主義的傾向に意義を唱えていたことと密接に関係している。竹越の著作『比較植民制度』(1906年)は、欧米の植民地主義を制度面から比較・分類したものであり、研究書の外観を呈している。しかしその執筆の動機は多分に政治的だったと思われる。それを示唆するのは、巻末に収められた日本の朝鮮支配について論じる数本の「附録」論文である。上述したとおり、竹越はマコーレー主義を批判的に日本の読者に紹介したが、それは、「同化病に何時の間にか傳染して朝鮮に向つて此同化主義を振廻はさむとして居る」日本の政治家に対する彼の批判と不可分の関係にあった〔竹越与三郎「『妹邦』か『勝國』か」竹越『比較植民制度』所収、pp.193-4〕。すなわち、同化主義的教育を受けた現地人が反帝國的な運動を起こしている英領インドの実例を提示することで、日本が朝鮮において同化主義教育を採用することに反対する自らの立場を正当化したのである。

竹越同様、持地においても、マコーレー主義的な教育政策への「学術的」批判が、日本植民地主義の同化主義的傾向に対する批判と深く関係していた。また、自らが実際に指揮した教育政策—台湾における現地人教育—と連動するものであった点においても、持地のマコーレー主義批判は重要である。マコーレー主義教育はインド人を「イギリス人化」することを志向したものとみることができ、持地はそれが「失敗」に終わったことを、台湾人を「日本人化」することの是非と結びつけて考えた。彼は、初期の台湾教育政策について、「同化の目的を以て施設せらるものにして、新附の隸民を速やかに日本人化せんと期待したるものの如し」という認識を持っていたのであり(持地『台湾植民政策』、p.282)、実際に学務課長(1903-11年)として「日本人化」を意識的に避ける非同化主義的教育を推し進めたのである。

〈比較のポリティクス〉の ^{トランス} 間 - 帝国性 ^{インベリアリティ}

竹越や持地の例にみられるような英領インド教育政策をめぐる日本の植民政策論者の〈比較のポリティクス〉を理解するためには、日本以外の植民地帝国が同政策をどう見なしていたか、そして前者がそこからどのように学んだかを明らかにすることが肝要である。本研究は、竹越と持地の思想のテクスト分析と並行するかたちで、その背景に存在したと考えられる既存の欧米の植民政策(論)が同時代にマコーレー主義をいかに論じていたのかについて、間-テクスト的な検証も行った。その結果、欧米において英領インド教育政策が植民地教育の失政の典型例としてモデル化され、他の様々な植民地的文脈に関する理論・実践に応用されていた事実が浮かび上がってきた。すなわち、インドのマコーレー主義をめぐる比較言説は、間-帝國的な空間のなかで既に流布していたのであり、竹越や持地の言説はその系譜のなかに収まるものであると見るのが可能である。

大まかにいって、19世紀後半以降に強い影響力を持つことになる二つの思想潮流が、マコーレー主義の「危険性」を引き合いに出しつつ反同化主義的な教育政策の必要性を唱える〈比較のポリティクス〉の基盤を形成していった。一つはヘンリー・メインのインド農村社会論に起源を持つイギリスの間接統治論であり、もう一つはギュスターブ・ルボンの現代インド社会論を起点として広まっていったフランスの反同化主義論である。ルボンは1886年に発表したインド社会論でマコーレー主義を初めて本格的に批判したが¹⁾、そのわずか数年後に、パリで行われた国際植民地会議(1889年)において、インドの「失敗例」を参照しながらフランス帝国に対して同化主義的教育政策からの転換をもとめる演説を行っている²⁾。ルボンの英領インド教育政策観は、その後多くのフランス人学者・植民地官僚に影響を与え、「反同化主義」の一派の形成を促しただけでなく、インドをめぐる彼の〈比較のポリティクス〉自体がインドシナやアフリカのフランス領で反復されていった。一方、イギリス間接統治の系譜では、エジプトにおいて事実上の支配者として君臨したクローマー郷が極めて重要である。クローマーはインド在任中から英語による人文教育の弊害について総督やインド省大臣に進言するなどしていたが³⁾、新たに赴任したエジプトにおいては、「インドの教訓」を活かす〈比較のポリティクス〉を実践し、英語による人文エリート教育を意識的に避ける政策を実行した⁴⁾。

竹越および持地の英領インド教育観は、こうした二つの潮流の双方から直接的あるいは間接的影響を受けていた。竹越は、英領インド型の教育を批判する一方、イギリス帝国内ならばエジプト、フランス帝国内ならばチュニジアの統治モデルを評価したが、前者はイギリスの間接統治、後者はフランスの反同化主義の流れに位置づけられうるものであった。一方持地の場合、影響はより直接的だった。彼の1912年の著作にはクローマーへの好意的言及があるだけでなく、附録として収められた論文の一本は、フランス人帝国主義者のポール・シャイエ＝ベールの英領インド教育政策論を日本に紹介すべく執筆されたものであり、フランス反同化主義の影響を読みとることができる。持地がとりあげたシャイエ＝ベールの著作の英訳版 *Administrative Problems of British India* (1910) には、マコーレー主義的教育を「最悪の種類 of 政治的失態」として批判する下りがあり、その言辭はルボンを彷彿させるものであった⁵⁾。

考察とまとめ

竹越与三郎と持地六三郎の比較植民政策論を、その英領インド植民地政策観に絞って分析することによって、以下の二つの点が重要な論点として浮かび上がってきた。

まず一点目は、比較という行為そのものに内在する政治的(ポリティカル)な動態である。日本の読者に向けられた竹越と持地のマコーレー主義教育に関する言説は、日本帝国内の植民地教育政策をめぐる具体的な議論—台湾・朝鮮において同化主義的な教育を導入するか否か—に対する彼らの主張を正当化する手段として機能した。両論者とも、全般的にはイギリスの植民政策を高く評価していたにも関わらず、インドにおける教育政策に関してはそれに極めて厳しい評価を下していたことは＜比較＞を考察するにあたって示唆的である。すなわち、植民政策論における比較行為は、異なる諸帝国の植民地主義を漠然と比べて特徴付けすることにとどまらず、特定の政策に関して政治的動機付けのもとに行われたのである。

二点目は、＜比較のポリティクス＞自体のグローバルな分布と帝国を跨がった環流である。他国の植民政策に言及することを通じて自国の植民政策に関する自らの見解を正当化しようとする試みは、後進の植民地帝国である日本に固有であったわけではまったくなく、イギリスやフランスにおいてもごくありふれていた。竹越と持地の言説の起源を探るべく行った間-テキスト的な読解のなかから見えてきたのは、諸帝国間の境界を横断するかたちで伝播していったのが、比較植民政策論の知識だけではなく、それに内在する＜比較のポリティクス＞そのものであったという事実である。竹越や持地が日本帝国において反復していたのも、究極的にはこうしたポリティクスそのものであったとみることが十分に可能であろう。

謝 辞

公益財団法人三島海雲記念財団より研究助成を賜り、おかげさまで、多額の旅費をともなうイギリスでの一次史料調査をおこなうことができ、深く感謝しております。2011年7月には、本研究の成果の一部を盛り込んだ研究論文を英国ブリストル大学で開催される国際ワークショップ *Colonial Circulations: Colonialism in Comparative Perspective* において発表する予定です。今後も本研究の成果を活かし植民地主義と比較に関する研究を続けていく予定です。

文 献

- 1) G. Le Bon, 'Modern India' [translated by Mark Stirrup from an article on *Revue Scientifique*, 20 November 1886] in *The Journal of the Manchester Geographical Society*, vol.2 (1886), pp.352-64, p.358.
- 2) *Compte-rendu de Congrès Colonial International de Paris*, 1889 (Paris: A. Challamel, 1889), p. 58.
- 3) Roger Owen, *Lord Cromer: Victorian Imperialist, Edwardian Proconsul* (Oxford: Oxford University Press, 2004), pp.168-9.
- 4) Cromer to Strachey, 3 April 1906, *Cromer Papers* (Public Record Office, FO 633/8), p.447.
- 5) Joseph Chailley-Bert, *Administrative Problems of British India* (London: Macmillan, 1910), p.566.